

埼玉アーツシアター通信

近藤良平×ノゾエ征爾

藤田貴大

吉田鋼太郎

バットシエバ舞踊団

ピアノ・エトワール・シリーズ

25th

SAITAMA
ARTS
THEATER

SAITAMA
ARTS THEATER
PRESS
VOL.83

2019.10-11



Tribute to 蜷川幸雄

10

井上尊晶

亡き人の遺志を どう受け止めるのか



いのうえ・そんしょう
1987年から演出助手として
蜷川作品に参加。演出家として
は2001年STUDIOコクーン・プロジェクト『カスパー』で
デビュー。近年の演出作に、
『オセロー』、ミュージカル『ス
クルージ』、『少年たち』など。
Photo ©宮川舞子

取材・文 ●
上野紀子 (演劇ライター)

30年もの間、演出補として蜷川作品の現場を支え続けた井上尊晶さんは、巨匠亡き後も「まだどこかで、彼のやったことを追い求めているところがある」と率直な思いを明かした。

「心のどこかに存在しているんでしょうね。“こんな時、彼だったらどう言うかな”と、常に答えを求めている。ただ、蜷川さんが言うことに意味があるわけで、それを僕がやっても仕方がない。自分で答えを埋めていかなくては……ってことを最近やっと実感しているところです」

師と出会ったのは17歳の時。知人に紹介され、その時初めて“演出家”という職業を知った井上さんを、蜷川さんは自分の稽古場へ誘った。そこから30年に渡る鉄壁の二人三脚が始まったのだ。

「蜷川さんはけっして完璧な人ではなかった。時には僕に『ここは変えたほうがいいかな?』と聞いて



『海辺のカフカ』(2019年) Photo ©渡部孝弘

きて、自分では処理できない時も、誰かに背中を押されたい時もあったのだろうなど。他人の話聞き、受け入れる度量があるんですね。ヘンなプライドがないから、人に何か言われても切り捨てたりしない。全部受け止めて、最終的に自分の手柄にしちゃう(笑)。でも、そんな“自分だけのアイデアじゃない”作品を生み出すことで、世界一と呼ばれる蜷川組のスタッフが出来上がったのだと思います」

今年6月、『海辺のカフカ』(2012年初演)のラスト公演となる再演の幕が降りた。海外でも絶賛された蜷川演出の人気作を無事に完走させて、「肩の荷は降りたけれど、また蜷川さんの作品が観たいな〜と純粋に思いますね。何も考えずに、すごいって思いたい」と笑う。だが、10月にはまた新しい、刺激的な荷を背負うことが決まっている。蜷川さんの依頼により劇作家の藤田貴大さん(マームとジブシー)が執筆した“蜷川幸雄の物語”、2016年に公演を予定していたが蜷川さんの体調不良で公演延期となった『蜷の綿-Nina's Cotton-』が、晴れてリーディング公演として初演を迎えることになった。その演出を任されたのである。

「藤田君のあの言葉を、どうやって演劇にするのか考え込んでいますよ(笑)。ただ、この公演は能の表現と似ているなど感じるところがあるんですね。亡霊としてのシテという役割がいて、亡くなった人の思いをワキという旅の僧に語っていく。じゃあ、それを現代演劇でどう表現できるか。亡き人の遺志を、いかに我々観客が受け止められるのか…」

蜷川組の現場で学んだのは「何でも方法を変えて試してみる」粘り強さ。「俺流」はまだ模索中」だそうだが、師の生涯が綴られたテキストへの挑戦が、新たな出発点となるのかもしれない。今度は蜷川さんに、背中を押されて。

「まあ、面白い30年でしたよ。ここから30年が、どうなるかなあ(笑)」



Photo ©小川重雄

25th

SAITAMA
ARTS
THEATER

彩の国さいたま芸術劇場
開館25周年

CONTENTS

4 PLAY+DANCE > 彩の国さいたま芸術劇場開館25周年記念
スペシャル対談

8 PLAY > 『蜷の綿 -Nina's Cotton-』リーディング公演
『まなざし』

10 PLAY > 彩の国シェイクスピア・シリーズ第35弾 『ヘンリー八世』

12 DANCE > バットシェバ舞踊団／オハッド・ナハリン
『Venezuelaーベネズエラ』

14 MUSIC > 彩の国さいたま芸術劇場開館25周年記念
ピアノ・エトワール・シリーズ

17 MUSIC > ピアノ・エトワール・シリーズVol.37
ルーカス&アルトゥール・ユッセン
ピアノデュオ・リサイタル

18 PLAY > 彩の国シェイクスピア・シリーズ第36弾 『ジョン王』

19 REVIEW

20 イベントカレンダー／チケットインフォメーション／彩の国シネマスタジオ

23 INFORMATION

24 COLUMN > 林家彦いちの『一歩外へ』

編集◎川添史子、桐原律子 表紙画◎波多野光 デザイン◎GOAT

©公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 Published on 1. Oct. 2019 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
※掲載情報は、2019年9月15日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。



劇場との一体感あるクリエイション

—今号は、彩の国さいたま芸術劇場（以下さい芸）を支えてくださっている近藤さんとノゾエさんに、25周年記念号の巻頭を飾っていただきます。お二人が顔を合わせるのは初めてですか？

近藤 こうして面と向かってお話しするのは初めてですね。5月のコンドルズ公演を観ていただいたみたいで。

ノゾエ 『Like a Virgin』めちゃくちゃ面白かったです。無音のダンスシーンでは、「言葉を使わないがゆえの豊かさがこんなにも広がっていくんだ！」と感動しましたし。いつも、どうやって作品を組み立ていくんですか？

近藤 基本、コンドルズは台本と呼ばれるものがなく、メンバーと稽古をしながらキーワードをいっぱい探して、それを広げたり、散りばめていく感じですかね。説明

が抽象的ですけど。

ノゾエ あ、僕も自分の劇団（はえぎわ）では似たようなつくり方かもしれません。まずは断片的なテキストを使いながら、稽古場で衝動的に「この瞬間好きだな」「この絵はいいな」というのを俳優と見つけていって、頭の中にキープしていく。で、その点（アイデア）を辿って行って「いい地図になるぞ」と思うルートを見つけると一本の芝居になっている……ということが多いんです。いつも、自分の台本から外れたいというか、その日、その場に流れる気分みたいなものを大事にしたいと思っているんですよ。それにしても先日のコンドルズは大ホールの舞台機構もフルに活用していて、さすが長年さい芸で公演されているカンパニーだなと、勉強になりました。

近藤 この劇場はスタッフがどこか人懐っこいというか（笑）、みんなが一緒になってつくってくれるおかげでしょうね。ここで

上演し始めてもうすぐ15年ですけど、早い段階から劇場と一体感を持ってクリエイションが続けてこられた気がします。多分、蛭川さんが育てた人材だからこそこの協力体制だと思うんですけど。こちらの要求を読み取って、スッとどこからともなく現れ、いろんな方法を提案してくれる。よっぽど、蛭川さんが厳しかったんでしょうね～！（一同笑）

ノゾエ さい芸のスタッフの優秀さ、僕もすぐわかります。だから時々「もしかして皆さんは、僕レベルの要求じゃ物足りないかもな。もっとハチャメチャなこと言ったほうがいいのか？」と思うこともあります（笑）。

—そう言っていたらとスタッフの士気も上がります。当財団がノゾエさんと初めて組んだのは、蛭川さんが演出予定だった「1万人のゴールド・シアター2016」（脚本・演出）でした。いきなりさいたまス

パーアリーナでの演出を手掛けていただいで……。

近藤 すごいですよね。初対面でこんな大企画をやらせてもらうなんて、さい芸も思い切ってるねえ（笑）。

ノゾエ 僕自身、気がついたらそこにいたという感じで、あの時は「やらない」という選択肢は頭に浮かばなかったですね。一体どうしたらいいのか分からない、けれど「何かをどうにかしてみたい」という意欲がムクムクとわいてきて。特別な力が流れて「このうねりに入って行くしかない！」みたいな、いい意味での異常な時間でした。稽古初日はレッドブル2本飲み干しましたし（一同笑）。

近藤 参加者の皆さんも、最初は何をやるのか戸惑っていたでしょうね。

ノゾエ 「この船はどこに向かうんだ？」と思いながら稽古場に来ていたと思います。その結果「乗るしかない船だ」と思っ



てくれたのは本当にありがたいですね。—ダンス部門のプロデューサーが声を掛けてコンドルズのさい芸公演が始まった年と、蛭川さんが芸術監督に就任したのは同じ2006年。お二人は劇場の公開対談シリーズ「NINAGAWA千の目」の第1回で対談もいただきました。

近藤 あの日まで、蛭川さんと会話を交わしたこともなかったんですよ。舞台上で「はじめまして」と挨拶したぐらいですから。確か「蛭川さん、コンドルズのこと知ってますか？」って聞きました（笑）。あの時、僕が「情熱大陸」（TBS）に出演した時の映像が流れたんですよね。まだ小学校低学年だった子どもに「仕事に行ってくるよ～」



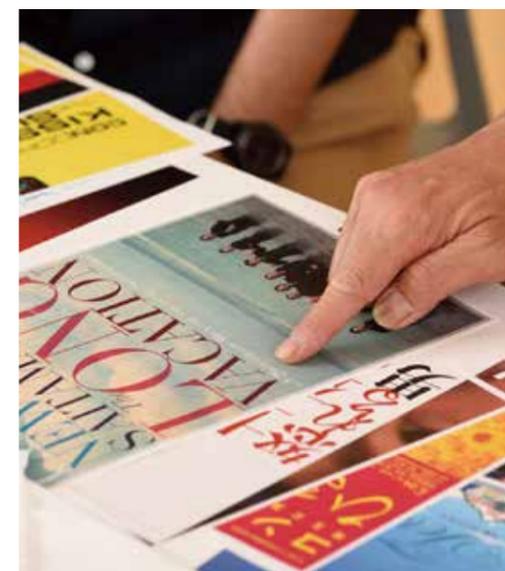
彩の国さいたま芸術劇場 開館25周年記念 スペシャル対談

祝25周年、記念号のトップはステキなゲストを迎えて贈る。2006年から彩の国さいたま芸術劇場で作品を発表し続けるコンドルズ主宰・近藤良平。そして2016年、蛭川幸雄氏の意を継いで「1万人のゴールド・シアター2016」の脚本・演出を手がけ、現在は「ゴールド・アーツ・クラブ」を導くノゾエ征爾。劇場を活気づけ続ける、二人の対談を贈る。

聞き手 ● 渡辺 弘（公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団）
文 ● 川添史子 Photo ● 山出高士



Ryohei Kondo
×
Seiji Nozoe



近藤良平 × ノゾエ征爾

（コンドルズ主宰・振付家・ダンサー）

（劇作家・演出家・俳優・はえぎわ主宰）

なんて声を掛けて、バイクで家を出るところを見て蛭川さんが、「これはいいな〜」っておっしゃってました(笑)。

——蛭川さんもバイクに乗っていた時期がありましたしね。

近藤 そうなんです！「舞台の仕事場に行くのが、まるで町工場に行くみたいな雰囲気がいい」と褒めていただいた記憶が、妙に残っています。

発見だらけの「ハンドルズ」

——近藤さんは、埼玉県内の障がいのある人たちとのダンスチーム「ハンドルズ」でも作品をつくっていただいている、もう結成10年になります。

近藤 あっという間ですね。始める前は多少ドキドキしていましたが、いざ始めてみたら勝手に頭の中に思い描いていた困難さは全くなくて、むしろものすごく居心地



地がいい、愉快になってきちゃうような現場なんです。こちらが無理に引っ張らなくても、自然といろんなことが生まれてきますし、1回目からずっと参加している人もいれば、新しい人も参加してきている。県外公演もありますし、発展する予感があります。

ノゾエ (「ハンドルズ」の資料を見ながら) 第一回目が「突然の、何が起こるか わからない」、第二回目が「適当に やっていいこうと思ったの」と、毎回タイトルが面白いですね。

近藤 その年の稽古初日に、メンバーに近況報告の5・7・5を書いてもらうんですけど、それがそのままタイトルになっています。シュールでいいタイトルになるんですよ。ハンドルズは10年目。毎年成長があるし、こちらがお題を投げると必ず返ってくるし、まだまだいける感じがあります。最初は手が全然上がらなかった人が何年もかけて少しずつ動くようになったり、彼らの動きには、我々の知らない丁寧さがある気がするんです。ものの捉え方に別の角度を与えてくれるというか、思いもよらない発見がたくさん散らばっている感じがするんですよ。

「ゴールド・アーツ・クラブ」新たな課題

——ノゾエさんには現在「1万人のゴールド・シアター2016」から派生した、60歳

以上のための芸術クラブ活動「ゴールド・アーツ・クラブ」の公演をお任せしています。「ハンドルズ」も「ゴールド・アーツ・クラブ」も、お二人のしなやかな統率力が光りますが、参加者とのコミュニケーションで、心がけていることはありますか？

近藤 こちらが一步踏み出して触れていくと、お互いにワクワクできる気がしますね。表現をするときは無防備になって欲しいですから。そのためには、積極的に褒める作業が大事だと思っています。

ノゾエ いいと思ったところを、素直に言



葉にしていくってことですよ。

近藤 そうそう。そうすると距離が縮んでいくんですよ。

ノゾエ 僕も同じですね。参加者の皆さんは、そもそもどんな表現がよくて、何が悪いのか分からない状態で稽古場にいらっしやるんです。なので「人と違っていてもステキなんです」とか、こちらがいいと感じたところを積極的に教えてあげたい。表現の入り口にいる方たちに、“やっちゃいけないこと”や“悪いこと”はないんだ……ということから伝えたいと思っています。

——「ゴールド・アーツ・クラブ」は年末にワークショップが行われますね。

ノゾエ 少しずつ経験を積んでくると、参加者の皆さんにも欲が出てくるでしょうし、その向上心にも応えないといけないという、新たな課題が見えてくる気がします。あと、彼らの演技が良くなってほしい、



演劇をもっと好きになってほしい、ステキな表現者になってほしいという気持ちと裏腹のようなんですが、技術が身につくすぎると目指すものと離れてしまう気もしています。この矛盾が演劇なんだろうけど、初めてやった時の初々しさ、あの美しさを、どうやって更新し続けるかの方法も考えたと思っています。

——今日は素晴らしいお話を本当にありがとうございました。今後とも彩の国さいたま芸術劇場を、どうぞよろしくお願いたします。



コンドルズ「Like a Virgin」 Photo © HARU



ゴールド・アーツ・クラブ「病は気から」 Photo © 宮川舞子



ノゾエ 征爾

Seiji Nozoe

脚本家・演出家・俳優、劇団「はえぎわ」主宰。1995年、青山学院大学在学中に演劇を始める。1999年に劇団「はえぎわ」を始動。以降、全作品の作・演出を手掛ける。映画やTVドラマへ俳優として出演するほか、外部公演にも脚本家、演出家、俳優として多数参加。2010年より世田谷区内の高齢者施設での巡回公演(世田谷パブリックシアター@ホーム公演)や、広島、北九州、静岡など地方での長期滞在創作でも幅広く活動。2012年、はえぎわ公演『〇〇トアル風景』にて、第56回岸田國士戯曲賞受賞。「1万人のゴールド・シアター2016」では脚本・演出を手掛けた。近年の演出作品に『太陽のかわりに音楽を。』『命売ります』など。10月に音楽劇『トムとジェリー〜夢よう一度〜』(演出)大阪公演、野外劇『吾輩は猫である』(脚本・演出)を上演予定。

近藤 良平

Ryohei Kondo

ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。振付家・ダンサー・「コンドルズ」主宰。第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞、第67回芸術選奨文部科学大臣賞、第67回横浜文化賞受賞。TBS系列『情熱大陸』、NHK『地球イチバン』など出演。ほかにもNHK『サラリーマンNEO』、『からだであそぼ』、野田秀樹演出演NODA・MAP『バイバー』等に振付・出演。NHK連続テレビ小説『てっぺん』オープニング、NHK大河ドラマ『いだてん』天狗倶楽部などの振付を担当。女子美術大学、立教大学などで非常勤教師も勤める。現在、コンドルズ公演や、NHKエデュケーショナルと共に0歳児からの子ども向け観客参加型公演「コンドルズの遊育計画」など、多様なアプローチでコンテンポラリーダンスの社会貢献に取り組んでいる。愛犬家。

こちらが一步踏み出して触れていくと、お互いにワクワクできる気がしますね。(近藤)

Ryohei Kondo

×

Seiji Nozoe

「人と違っていてもステキなんです」とか、こちらがいいと感じたところを積極的に教えてあげたい。(ノゾエ)



Photo © Ilya Melnikov

爆発的な力、激しい感情

バットシェバ舞踊団／オハッド・ナハリン
『Venezuela - ベネズエラ』

Interview

オハッド・ナハリン

連続し続ける緻密な動き、放たれるエネルギー、
強靱なダンサーたちによる、ドラマチックなムーヴメント——

来年3月に上演するバットシェバ舞踊団『Venezuela - ベネズエラ』は、
振付家オハッド・ナハリンが同舞踊団の芸術監督としては最後に手掛けた作品だ。

取材・文 ● 上野房子 (舞踊評論家) 2019年8/19日、メールでのインタビュー

オハッド・ナハリン
(振付家)
Ohad Naharin

1952年イスラエル生まれ。20代から舞踊を始め、ダンサーとしてバットシェバ舞踊団で活躍の後、渡米しマーサ・グラハム舞踊団に入団。その後、ジュリアード音楽院で学ぶ。1980年に振付家としてデビュー。1990年バットシェバ舞踊団の芸術監督に就任し、以来『キール』(1990年)、『マブール(洪水)』(1992年)、『アナフェイス(細胞分裂)』(1993年)などの話題作を含めた30以上の作品を発表。また、独自の動きのテクニック「GAGA(ガガ)」を考案、ダンサーたちは日常的なトレーニングを通じてムーヴメントの新たな可能性を探し、ダイナミックな感性を覚悟している。彼の作品はネザーランド・ダンス・シアター、リヨン・オペラ座バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団など、世界中の著名なダンスカンパニーやバレエ団で踊られており、世界で最も注目される振付家の一人。2018年にバットシェバ舞踊団の芸術監督を退任するが、現在もハウス・コレオグラファーとして精力的に作品を創り続けている。

—— ナハリンさんがバットシェバ舞踊団芸術監督として創作した最後の作品『Venezuela』。創作の様子を教えてください。

私の頭のなかは、いつも燃え盛っているんだ。アイデアやイメージが飛び交い、いつだって振付という作業に突進する心持ちになっている。だが、現実には初日というデッドラインが存在し、整然と準備を進めなくてはならない。ダンサーと顔を合わせる前に、やるべきことは山ほどある。創作プロセスを促す決まり事や規範を定め、今までとは異なる作品を目指す。想像すらしていなかった未知の場所に辿り着くことを願いつつ。作品の構想を練る時には、強い感情が湧き上がるようにしている。その感情に揺り動かされ、何かを選択できるようにね。

——今回は、どのような決まり事を取り入れましたか。

色々なことを試みた。たとえば、ダンサーには、社交ダンスを勉強してもらったよ。さらに、繊細さを探求し、何のものにも捉われず、爆発的な力を出し、激しい感情を明確なフォームにし、情熱と想像力を連携させることにも挑んだ。ダンスで物語を語りあげるには、幾つものルールを使いこなす必要があるんだ。

—— グレゴリオ聖歌から南アジアの音楽まで、多彩な音楽が用いられています。

特定の地域や時代には捉われず、好きだ！ と思える音楽を探した。そうやって



Photo © Ascaf Avraham

チケット発売日 一般 12.7(土) メンバーズ 11.30(土)

バットシェバ舞踊団／オハッド・ナハリン
『Venezuela - ベネズエラ』

2020年3.13(金)19:30 / 14(土)・15(日)15:00 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
[演出・振付]オハッド・ナハリン [出演]バットシェバ舞踊団 [上演時間]約80分(途中休憩なし)

チケット(税込) 一般 前売S席7,000円 A席4,000円
U-25* 前売S席3,500円 A席2,000円 / メンバーズ 前売S席6,300円 A席3,600円

※演出の都合により、開演時間に遅れたり途中退場されますと、ご入場できません。予めご了承ください。

※当日券は各席種とも+500円

※A席(サイドバルコニー・2階席の一部)は舞台の一部が見えない場合がございます。

※U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

※82号より13日(金)の開演時間が変更となりました。

【関連企画】《GAGAワークショップ》

2020年3月 GAGAインテンシブ および GAGAビーブル

※日程やお申込み方法など詳細は、財団HP・SNS・チラシ等でお知らせいたします。

う理由を挙げるかもしれないが。

芸術監督を退任、新たな旅

—— どのような経緯で、ナハリンさんはバットシェバ舞踊団の芸術監督退任を決意されたのでしょうか。

10年以上前から、芸術監督を誰かに引き継ごうと考えてきた。芸術監督というのは、実に大きな責任を伴う仕事だからね。この仕事に費やしてきた時間とエネルギーを、私がほんとうにやりたいこと、得意なことに注ぎたいと思うようになった。後任のギリ・ナヴォトは、有能なディレクターだ。むしろ、彼女のほうが適任者だと思っているよ。彼女が私の助言を必要としていれば、いつだって助言をするし、その逆もまた然りだ。

—— 昨年来、ナハリンさんは、バットシェバ舞踊団ハウス・コレオグラファーとして活動されています。

今まで通り、GAGAを教え、リサーチを

出会った音楽を、様々な要素と結びつけていく。たとえば、グルーブ、メロディ、美しさ、繊細さ、簡潔さ、限界を超えようとする意思、官能、熟考、瞑想、複雑さ、奔放さ……。今回は、音楽とダンスの関係を探り、両者の自立した関係にもこだわった。—— 観客は作品を見、聞かたわら、そこで育まれる記憶の何たるかを考えさせられ、意表を突かれることでしょう。

私達は、人生のその瞬間、もしくは作品のその場面を経験するとき、過去に経験した何かを基準にする習性がある。それ以前の経験によって、いま現在の思考や感情が操作されるわけだ。私はつねに自分と観客に問いかけてきた。何ものにも捉われずに、この瞬間を受け止めよう、と。この作品では、我々のそんな習性に疑問を投げかけ、それを面白がり、笑い飛ばし、あるいは封印して欲しい。

—— 日本には〈百聞は一見に如かず〉という言い回しがあります。『Venezuela』と通底するものを感じます。

面白い表現だね。私のこの作品、それから私が取り組んできたリサーチ、生き方にも大いに関係すると思う。

—— 本作は、特定の国についての作品ではありません。地球儀を手にしていたナハリンさんの指先が、たまたまベネズエラに触れたからそう命名した、という通説の真偽のほどは？

とりあえずその通りだ、と答えておこう。顔を合わせて話す機会があったら、違

行い、リハーサルをし、作品を作り、再演を重ねている。いったん初演された作品でも、発展、進化させることによって、ダンサーの新たな面を発見できるし、彼らの限界を押し広げることも可能だ。もう一つ、変わらないことがある。今後も、バットシェバだけで新作を作り続けるつもりだ。—— ダンサーとの関係に、何か変化があったのでしょうか。

コミュニケーションをさらに取りやすくなった、と感じている。私はダンサー達とリサーチを行い、発見することに専念しているから、彼らも、上司ではなく、旧友のように気軽に私と接することができるのではないか。

—— カンパニーの運営面から離れ、公私にも変化が生じたか。

大いに変化したね。やりたいと思っることが、やるべきこと、やらなくてはならないことになる。そんな願望が叶いそうな手応えを感じている。

彩の国さいたま芸術劇場開館25周年記念
ピアノ・エトワール・シリーズ

2015年～2019年に 登場した エトワールたち

彩の国さいたま芸術劇場はこの秋、開館25周年を迎えた。1997年度から10年間、ピアニスト100人を紹介するシリーズ「ピアニスト100」を行い大きな注目を集めた当館は、そのシリーズを受け継ぎ21世紀のこれからの音楽界を担うスター（エトワール）たちが続々登場する「ピアノ・エトワール・シリーズ」を2007年度から展開中。開館25周年を記念してこの5年間に登場した未来の巨匠たちの演奏を振り返ろう。

文 ● 高坂はる香（音楽ライター）



Vol.27 ベンジャミン・グローヴナー Photo◎加藤英弘



Vol.28 チョ・ソンジン Photo◎加藤英弘



アンコール! Vol.4 フランチェスコ・トリスターノ Photo◎加藤英弘



アンコール! Vol.5 福間洸太郎 Photo◎加藤英弘



アンコール! Vol.6 アレクサンダー・ガヴリリュク Photo◎加藤英弘

世界の旬の若手ピアニストに 出会えた喜び

今聴いておくべき国内外のピアニストを丁寧にセレクトし、すでに日本で知られている若手はもちろん、もっと知られるべき才能も紹介してきた、ピアノ・エトワール・シリーズ。この5年間も、振り返ると数々のすばらしいピアニストが、その魅力を存分に伝えるプログラムで舞台上に立てきた。中には、このシリーズに選ばれているからと関心を持ち、一度聴いてみようかとホールに足を運んだことで出会えたピアニストもいる。エトワール・シリーズのファンの中には、そんな経験をしたことがある方も多いのではないだろうか。

その筆頭として強く印象に残るのが、ベンジャミン・グローヴナーだ。BBCプロムスには19歳だった2011年以来度々出演、同年にはデッカと専属契約を結ぶなど、彼の故郷イギリスではすでに注目された存在だった。とはいえ、2015年のシリーズに登場した際は、まだ2度目の来日。日本での知名度は高くなかった。実際に演奏を聴き、彼が繰り出す、J. S. バッハやフランクで聴かせたオルガンのような響き、職人技と呼びたくなる完成度が高く堂々とした音楽表現に圧倒された。私に



Vol.29 田村 響 Photo◎加藤英弘



Vol.30 ニコライ・ホジャイノフ Photo◎加藤英弘



Vol.31 キット・アームストロング Photo◎加藤英弘



アンコール! Vol.7 上原彩子 Photo◎加藤英弘



Vol.33 パヴェル・コレスニコフ Photo◎加藤英弘

とって、このピアニストの生の音を体験することができたのは、まさにこのエトワール・シリーズの存在のおかげだった。

一方、音楽界の熱い視線が寄せられることになる若手を、絶妙のタイミングで招いたこともあった。

2015年10月のショパン国際ピアノコンクールに優勝し、今や世界の一流オーケストラやホールから引っ張りだことなった、チョ・ソンジンだ。エトワール・シリーズに出演したのは、2016年1月のことなので、公演は当然、コンクールに優勝する以前から予定されていた。それもあって、同コンクールの入賞者ガラコンサート・ツアーと重なったことによる公演日の変更というハプニングはあった。しかし、結果的にこの彩の国での公演が、優勝後初の日本でのソロ・リサイタルということになり、チケットを入手していた方々は、思いがけず、話題の渦中のピアニストのソロをいち早く日本で聴くことになった。

余談だが、現地でコンクールの取材をしていた私は、この「埼玉アーツシアター通信」の記事のため、ショパンにかける挑戦の只中のチョ・ソンジンの練習室を訪ね、ショパンだけでなく、演奏予定だったシューベルトによせる想いを聞いたのだった。あのときは、彼がこれほどの大ス

ターになるとは想像していなかった……。

コンクール後の成熟を じっくり堪能

コンクールでタイトルをとって注目を集め、日本で安定した人気を集めるピアニストがほどよいタイミングで招かれたことで、練り上げられたプログラムをじっくり聴くことができた公演も多い。

チョ・ソンジンと同じ回のショパン国際ピアノコンクールで第2位となったカナダのシャルル・リシャール＝アムランは、コンクールから3年後の2018年に登場。ショパンだけでなく、20世紀アルメニアの作曲家バジャニアン作品も含む趣向をこらしたプログラムを用意して、自身の音楽性をたっぷり伝えてくれた。

2010年、18歳でショパン国際ピアノコンクールファイナリストとなり、日本にファンを増やしたロシアのニコライ・ホジャイノフは、その後ダブリンでの優勝やシドニーでの入賞、数々の演奏活動を経験して音楽の幅を広げた2016年に彩の国のステージに立った。ショパンに加え、ストラヴィンスキーやシューマンで、語りかけるような詩情たっぷりの演奏を披露した。

2013年エリザベート王妃国際コンク

ルで第2位となったレミ・ジュニエは、2019年に登場。フランス人ながら得意なのはドイツものやロシアものだといひ、ベートーヴェンやストラヴィンスキーをじっくりと聴かせてくれた。

ダニエル・シューは、2015年浜松国際ピアノコンクール、2017年ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで第3位となり、着々とキャリアを積み重ねているアメリカのピアニスト。2018年に出演し、両コンクールで非常に高い評価をうけたベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ》Op.110を演奏。21歳という若さを忘れさせるような成熟した音楽を奏でた。

2005年ルービンシュタイン国際ピアノコンクールに優勝、その4年後の2009年に一度エトワール・シリーズに登場していたアレクサンダー・ガヴリリュクは、リクエストを受けて2016年に「アンコール!」で再登場。得意とするロシアの超絶技巧作品を親密な響きで聴くことができる、貴重な機会となった。

コンクールを超えた 才能を聴く楽しみ

また、音楽だけに偏らない環境下で育ち、大ピアニストの薫陶を受けた若者たちも登場した。

シベリアに生まれ、科学者の家系に育つなかでピアノの才能を発揮し、エリザベト王妃音楽学校でマリア・ジョアン・ピリスに学んだパヴェル・コレスニコフは、シューベルト、シューマン、ショパンというロマン派のプログラムを演奏。これが彼にとって日本で初めてのリサイタルとなった。

ロサンゼルスに生まれ、ピアニストとして研鑽を積む傍らで物理や数学も学んでいたというキット・アームストロングは、アルフレッド・ブレンデルの数少ない愛弟子としても知られる。ルネサンス期の作曲家スウェーリンクや、J. S. バッハとC. P. E. バッハ、さらに自作曲を合わせるというオリジナリティあふれるプログラムで、シリーズに爽やかな刺激を与えた。

同じく自作曲も含むプログラムで、古きものと最先端のものがリンクした音楽の世界を見せてくれたのは、「アンコール！」に出演したフランチェスコ・トリスターノ。テクノも手がける彼の世界初演も含む自作曲と、J. S. バッハが交互に演奏されることで、ピアノの表現の可能性、バロック音楽の新しい魅力を教えてくれた。

彩の国で聴かせた 日本人ピアニストの深み

日本人ピアニストのラインナップも充実していた。

2007年のロン・ティボー国際コンクール優勝の田村響や、「アンコール！」で登場した、2002年チャイコフスキー国際コンクール優勝の上原彩子、2010年ジュネーヴ国際コンクール優勝の萩原麻未といった面々は、日本ピアノ界の快挙として話題となったタイトルの獲得から年月を経て、ますます充実し、深みを増した音楽を届けた。

知性と高い美意識を感じる演奏活動で人気を集める福岡洸太郎は、自らの委嘱による武智由香の新作と、ドビュッシー、クセナキス、武満、スクリャービン、プロコフィエフ、そして自ら編曲を手がけたJ. S. バッハという、凝ったプログラムを演奏。照明にもこだわり、この日この場所ならではの特別な時間を創出した。

*

日々コンサート通いを続ける中でも、ピアノ・エトワール・シリーズで聴いたリサイタルには、印象深いものが多い。それは、ピアニストのセレクトはもちろん、ホールの響き、プログラムも相まってる結果といえるだろう。これからも、毎シーズンのピアニストと演目のラインナップ発表を楽しみにしたい。



Vol.34 シャルル・リシャル＝アムラン Photo◎加藤英弘



Vol.35 ダニエル・シュエー Photo◎加藤英弘



Vol.36 レミ・ジュニエ Photo◎横田敦史



アンコール! Vol.8 萩原麻未 Photo◎加藤英弘

「ピアノ・エトワール・シリーズ」 2015年度～2019年度のあゆみ

2015年度

2015.9.5(土)
Vol.27 ベンジャミン・グローヴナー

2015.11.29(日)
アンコール! Vol.4 フランチェスコ・トリスターノ

2016.1.22(金)
Vol.28 チョ・ソンジン

2016.2.20(土)
アンコール! Vol.5 福岡洸太郎

2016年度

2016.7.16(土)
アンコール! Vol.6 アレクサンダー・ガヴリリュク

2016.9.11(日)
Vol.29 田村 響

2016.11.19(土)
Vol.30 ニコライ・ホジャイノフ

2017.1.21(土)
Vol.31 キット・アームストロング

2017年度

2017.6.10(土)
アンコール! Vol.7 上原彩子

2017.11.11(土)
Vol.32 ケイト・リウ (公演中止)

2018.1.27(土)
Vol.33 パヴェル・コレスニコフ

2018年度

2018.6.10(日)
Vol.34 シャルル・リシャル＝アムラン

2018.10.28(日)
Vol.35 ダニエル・シュエー

2019.1.12(土)
Vol.36 レミ・ジュニエ

2019年度

2019.6.16(日)
アンコール! Vol.8 萩原麻未

2019.11.17(日)
Vol.37 ルーカス&アルトゥール・ユッセン
📄 詳細はP.17



©Marco Borggreve

2020.3.8(日)
Vol.38 ベアトリーチェ・ラナ
📄 詳細はP.22



©Nicolas Bets

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.37

ルーカス&アルトゥール・ユッセン ピアノデュオ・リサイタル

「ピアノ・エトワール・シリーズ」秋の公演に、シリーズ初のピアノ・デュオが登場!

本国オランダでは国民的人気を誇りチケットが早々に売り切れる、まさにスターの兄弟、ルーカス&アルトゥール・ユッセン。古典から現代まで幅広いレパートリーを持つ彼らが、彩の国でもピアノ・デュオの醍醐味を味わわせてくれる。

文◎高坂はる香(音楽ライター)



©Marco Borggreve

ユッセン兄弟からのメッセージ

再び日本で演奏できることを光榮に思います

私たちは、つねに多様性のあるプログラムを組むよう努めています。今回のプログラムの前半は、古典レパートリーのモーツァルトから始まります。次に、4手のために作曲された作品のなかで、おそらく最も美しい曲のひとつであるシューベルトの《幻想曲》を演奏します。後半は、フランスのレパートリーを中心に進めます。これらの作品は、ピアノ・デュオの魅力が極めて良い具合に組み合わせられていると思います。また、これらのレパートリーに加えて、皆さんに知られていない新しい作品を紹介することも大事だと考えています。ファジル・サイさんが、僕たちのために《夜》を作曲してくれたことを、とても名誉に思います。皆さんの前でこの曲を演奏するのをなにより楽しみにしています。

日本を訪れることを、とても楽しみにしています。これまでに2度、美しい国日本を訪問していますが、いつも素晴らしい時を過ごしました。僕たちは、日本の文化に敬意を表しています。また、日本の食べ物や音楽的環境が大好きです。再び日本で演奏できることを光榮に思います。

兄弟の20本の指が繰り出す ドラマティックなピアノの世界

来日を重ねる中、日本にもファンを増やしている、ルーカス&アルトゥール・ユッセン。兄ルーカスは1993年生まれ、弟アルトゥールは1996年生まれ。マリア・ジョアン・ピリスの秘蔵っ子として注目された初来日の頃は、細身の美少年デュオという風情だったが、今やすっかり大人。外見だけでなく演奏もダイナミックに成長し、古典派から近現代作品まで幅広いレパートリーを奏でる、大きな可能性を感じさせる二人組となった。

オランダに生まれ、それぞれ5歳でピアノを始めた彼らは、2005年のオランダ女王即位25年祝典での演奏をはじめさまざまな大舞台に立ち、祖国で絶大な人気を集めるようになった。そして2010年にオランダ人として初めてドイツ・グラモフォンと契約、国内外で盛んな演奏活動を行ってきた。

長らく共に勉強してきた彼らだが、その後、兄ルーカスはアメリカでメナム・プレスラー、マドリッドでドミトリ・バシュキエロフに師事、弟のアルトゥールは、アムステルダム音楽院で学んだという。20代半ばを迎え、それぞれの音楽性を育んだ二人は、息のあった美しい演奏からさらに一步踏み込んだ、個性で支え合い、ぶつかり合うデュオへの道を進んでいる。

今回のプログラムでは、2台ピアノと4手連弾、両方のスタイルが披露される。2台ピアノで演奏されるのは、モーツァルトの《2台のピアノのためのソナタ》KV 448と、ラヴェルの《ラ・ヴァルス》。そして4手では、プーランクの《4手のためのソナタ》や、彼らが録音も行っているシューベルトの《幻想曲》、ラヴェルの《マ・メール・ロワ》といった連弾曲のマスターピースが演奏される。

加えて楽しみなのは、ファジル・サイが兄弟のために書いた4手のための作品《夜》。ミステリアスな闇の世界が表現されている、生演奏の迫力でぜひ聴いてみたいダイナミックかつクールな楽曲だ。

物心つくころからともにピアノに向かい続けてきたからこそ可能な、自由自在なデュオの表現を体感しよう。

チケット販売中

ピアノ・エトワール・シリーズVol.37 ルーカス&アルトゥール・ユッセン ピアノデュオ・リサイタル

11.17(日) 15:00 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[曲目]
モーツァルト:2台のピアノのためのソナタ 二長調 KV 448(375a)
シューベルト:幻想曲 へ短調 D 940[4手]
プーランク:4手のためのソナタ(1918年,1939年改訂)
ファジル・サイ:夜[4手]
ラヴェル:マ・メール・ロワ(4手のための組曲)
ラヴェル:ラ・ヴァルス[2台ピアノ]

チケット(税込) 一般 正面席3,500円 メンバーズ 正面席3,200円
バルコニー席2,500円/U-25*(バルコニー席対象)1,000円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

2020年6月、 彩の国シェイクスピア・シリーズ第36弾 『ジョン王』 上演決定！

1998年のスタート以来、蛭川幸雄芸術監督のもとで、次々と話題作を発表してきた彩の国シェイクスピア・シリーズ。2017年12月からは、シリーズ2代目芸術監督に就任した俳優・吉田鋼太郎が演出する『アテネのタイモン』でシリーズが再開され、2019年2月に『ヘンリー五世』を上演、2020年2月には『ヘンリー八世』が控えており、いよいよ残すところ2作品に迫っている。

カトリック教会との確執、英仏戦争、貴族たちの反乱——2020年6月に上演される第36弾は、ジョン王の治世を描いた歴史劇『ジョン王』に決定。ロビン・フッド伝説や、サー・ウォルター・スコットの小説『アイヴァンホー』でも、好色で腹黒い王位篡奪者として描かれたジョン王。英国史上最も悪評高い王、たくさんの魅力的な人物たちが躍動する舞台となることだろう。

演出は引き続き吉田鋼太郎、そして生命力とユーモアにあふれた魅力ある若者“私生児”を主演として演じるのは、本シリーズ4作品目にして初の歴史劇への挑戦となる小栗旬。タイトルロールの“ジョン王”役には、同シリーズ常連の横田栄司、ジョン王が敵対する“フランス王”の役には吉田鋼太郎と、演劇界を代表する俳優が勢ぞろいする。

彩の国シェイクスピア・シリーズ第36弾『ジョン王』、乞うご期待！



吉田鋼太郎

小栗旬

横田栄司



Photo◎細野晋司

PLAY

『めにみえない みみにしたい』

7.13(土)～15(月・祝) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

藤田貴大が初めて作りあげた、子どもから大人まで一緒に楽しめる演劇作品。前回公演が好評を博し、北海道から沖縄まで全国14都市を巡る再演&全国ツアーが行われた。しゃぼん玉がふわふわと浮かんで海の底になったり、大きな布が森に見立てられたり、広い草原が広がったり……演劇の魔法によって一瞬にして場面が展開していく演出には、子どもたちの想像力が無限に広がったことだろう。じゃんけんやしりとりやサイコロ投げといったゲーム要素も満載で、ちびっ子たちも楽しそうに参加。前回よりもリズムが出て、少女の成長や自立、戦争、母と子のつながりといったテーマも、より濃く見えた気がした。



Photo◎加藤英弘

MUSIC

テアトロ・ムジーク・インプロヴィーズ

『うつくしいまち』

8.4(日) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

美術家ダリオ・モレッティが客席から登場し、子どもたちの心を掴んで始まった『うつくしいまち』。モレッティが描き始めると「何の絵だろう？」と客席から声がひそひそとあがり、絵が完成していく様子を映し出すスクリーンに夢中に。作品には海や山などの自然のほか、1週間にわたる埼玉での滞在、彼らがこれまで訪れた様々なまちの要素が詰まっており、“うつくしいまち”の世界が広がる。その中で野村誠のピアノとピアノカ、やぶくみこの自在な打楽器が相重なって、絵に立体感と物語を生み出していった。終演後はお客様がステージに上がって絵や楽器を間近に見て、出演者との交流も活発に行われた。



Photo◎宮川舞子

PLAY

さいたまネクスト・シアター 世界最前線の演劇3

『朝のライラック』[ヨルダン/パレスチナ]

7.18(木)～28(日)

彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO(大稽古場)

激変する世界情勢、紛争、テロ、難民問題などの社会的な動きを、同時代戯曲によって問題提起する「世界最前線の演劇」シリーズ第3弾。ISによる武装支配が進む中東のとある町で、ともに芸術教師の新婚夫婦を襲った悲劇。過激派組織による理不尽な暴力が横行し、生活の自由を奪われ、精神を蝕まれ、命までも脅かされる恐怖による支配下で暮らす市井の人々の姿を描いた戯曲を舞台化した。来日し、初日からの4日間アフタートークに登壇した作者ガンナム・ガンナム氏が、この戯曲を「叫び」と語っていたのが強く印象に残った。



Photo◎加藤英弘

MUSIC

埼玉会館ランチタイム・コンサート第40回

菅原 潤とN響メンバーによるアンサンブル

9.10(火) 埼玉会館 大ホール

N響フルート奏者・菅原潤の楽しいトークと共に贈りしたN響メンバーによる演奏は、最初モーツァルト3曲を。《フルート四重奏曲第1番》は第2楽章のフレーズごとの表情の変化が美しく、第3楽章はフルートとヴィオラの掛け合いが歌心に満ちていた。《ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲第1番》は華やかなヴァイオリンと深みあるヴィオラによる、たった2本とは思えない充実の響き。その後は《オーボエ四重奏曲》のピッコロ版や、ダマレ《白つぐみ》でピッコロの妙技を堪能。ペットボトルを使いフルートの鳴る原理の解説もあり、笛の魅力に浸った1時間だった。

大ホール 小ホール 音楽ホール 映像ホール 情報プラザ 彩の国さいたま芸術劇場 埼玉会館 埼玉会館

Calendar grid for October and November 2019, categorized by PLAY, DANCE, MUSIC, and CINEMA. Includes event details like dates, times, and venues.

大ホール 小ホール 音楽ホール 彩の国さいたま芸術劇場 埼玉会館 埼玉会館

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

CINEMA section featuring movie listings such as '彩の国シネマスタジオ', '家族のレシピ', and 'RBG 最強の85歳' with showtimes and prices.

PLAY section featuring theater listings such as '蝶の綿 -Nina's Cotton-' and '家族のレシピ' with showtimes and prices.

DANCE section featuring dance listings such as '第8回近藤良平と障害者ダンスチーム「ハンドルズ」による公演' and 'バットシェバ舞踊団'.

MUSIC

販売中

NHK交響楽団
下野竜也(指揮) 小山実稚恵(ピアノ)
11.2(土)16:00 **埼玉会館** 大ホール
 [曲目] ヴェルディ：歌劇《運命の力》序曲
 ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18
 ムソルグスキー(ラヴェル編曲)：組曲《展覧会の絵》
 チケット(税込) 一般S席6,500円 A席5,500円 B席4,500円
 U-25* (B席対象) 2,000円
 メンバース S席6,000円 A席5,100円 B席4,200円
 ※15:25～15:40に指揮者・下野竜也氏によるプレコンサート・トークあり。
 ※S席・A席は残席僅少。B席は予定枚数終了。

販売中

ピアノ・エトワール・シリーズVol.37
ルーカス&アルトゥール・ユッセン
ピアノデュオ・リサイタル  詳細はP.17

販売中

埼玉会館ランチャタイム・コンサート第41回
きりく・ハンドベルアンサンブル
12.6(金) 12:10(終了予定13:00)
埼玉会館 大ホール
 [出演] きりく・ハンドベルアンサンブル
 [曲目] シューベルト：アヴェ・マリア
 アダン：オー・ホーリー・ナイト ほか
 チケット(税込) 全席指定 1,000円

販売中

大塚直哉レクチャー・コンサート
オルガンとチェンバロで聴き比べるバッハの“平均律”
Vol.3 “平均律 wohltemperiert”の謎
 2020.2.2(日)14:00 **音楽ホール**
 [出演] 大塚直哉 (ポジティブ・オルガン、チェンバロ、お話し)
 [曲目] J. S. バッハ：《平均律クラヴィア曲集第1巻》より
 第18番から第24番
 チケット(税込) 全席指定 2,000円

発売日 一般 10.5(土) メンバース販売中

ピアノ・エトワール・シリーズVol.38
ベアトリーチェ・ラナ ピアノ・リサイタル
 2020.3.8(日)15:00 **音楽ホール**
 [曲目] J. S. バッハ：イタリヤ協奏曲 へ長調 BWV 971
 シューマン：ピアノ・ソナタ第3番 へ短調 作品14
 アルベニス：組曲《イベリア》第3集
 ストラヴィンスキー：「ペトルーシュカ」からの3楽章
 チケット(税込)
 一般 正面席3,500円 メンバース 正面席3,200円
 バルコニー席2,500円／ U-25* (バルコニー席対象) 1,000円
 ※78号において公演日の記載に誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

発売日 一般 10.5(土) メンバース販売中

サー・アンドラーシュ・シフ ピアノ・リサイタル
 2020.3.14(土)15:00 **音楽ホール**
 [曲目] シューマン：精霊の主題による変奏曲 WoO24
 プラームス：3つの間奏曲 作品117
 モーツァルト：ロンドイ短調 KV511
 プラームス：6つのピアノ小品 作品118
 J. S. バッハ：《平均律クラヴィア曲集第1巻》より
 第24番 口短調 BWV 869
 プラームス：4つのピアノ小品 作品119
 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第26番 変ホ長調 作品81a「告別」
 チケット(税込)
 一般 正面席11,000円 メンバース 正面席10,000円
 バルコニー席9,000円／ U-25* (バルコニー席対象) 4,000円

発売日 一般 12.1(日) メンバース 11.30(土)

埼玉会館ランチャタイム・コンサート第42回 春休みスペシャル
東京交響楽団メンバーによる《動物の謝肉祭》
 2020.3.30(月) 12:10(終了予定13:00)
埼玉会館 大ホール
 [出演] 東京交響楽団室内合奏団
 浦和児童合唱団(朗読) ほか
 [曲目] サン＝サーンス：組曲《動物の謝肉祭》 ほか
 チケット(税込) 全席指定 1,000円

チケット購入方法

インターネット

SAF オンラインチケット
 SAFオンラインチケットで、発売初日10:00から公演前日23:59まで受付いたします。

 [PC・携帯共通]
<https://www.ticket.ne.jp/saf/>

メンバーズ 登録のご住所へ無料配送

一般 【クレジットカード決済】 ▶ **コンビニ発券**
 または【コンビニ支払い】

*チケット代他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。

電話予約

チケットセンター 0570-064-939
 10:00～19:00(彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く)
*一部の携帯電話、PHS、IP電話からは受付できません。

メンバーズ 登録のご住所へ無料配送

一般 【コンビニ支払い】 ▶ **コンビニ発券**
*チケット代他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。
 *コンビニ支払い後にチケット配送も承りますが、チケット代のほかに配送料(配達1件につき400円)が必要です。

窓口販売

彩の国さいたま芸術劇場・埼玉会館窓口 (10:00～19:00)で直接購入いただけます。電話予約したチケットの引取もできます (メンバーズは登録のご住所への配送となります)。
*休館日をお確かめの上、ご来場ください。

メンバーズ 【口座引落】 **その場でチケットをお渡しします。**
*手数料はかかりません。

一般 【現金】または【クレジットカード決済】

チケット不正転売防止について

- ◎当財団主催公演チケットは、財団の同意なく有償で譲渡することを禁止いたします。
- ◎当財団が直接販売する主催公演のチケットは、購入者の氏名及び連絡先を確認した上で販売いたしております。



彩の国シェイクスピア講座Vol.3 『ヘンリー八世』徹底勉強会 受講者募集

コーディネーター：河合祥一郎

シェイクスピアの作品をさまざまな角度から掘り下げ、新しい魅力を発見する『彩の国シェイクスピア講座』。Vol.3では来年2月に開幕する『ヘンリー八世』を取り上げます！ぜひご参加ください。

〈第1回〉2020年1月13日(月・祝)
もうひとつの題名『すべて真実』の意味
 講師：河合祥一郎 (かわい・しょういちろう／東京大学教授)

〈第2回〉2020年1月26日(日)
『ヘンリー八世』の栄枯盛衰する男と女——史実とフィクションの比較
 講師：本多まきえ (ほんだ・まきえ／明治学院大学文学部准教授)

〈第3回〉2020年2月1日(土)
シェイクスピアは歴史を創る——文化的記憶と『ヘンリー八世』
 講師：井出 新 (い・であら／慶應義塾大学文学部教授)

〈第4回〉2020年2月8日(土)
『ヘンリー八世』翻訳ごぼれ話
 講師：松岡和子 (まつおか・かずこ／翻訳家)
 進行：河合祥一郎 (東京大学教授)

発売日 [通し券]一般 11.24(日) メンバース 11.23(土・祝)

彩の国シェイクスピア講座Vol.3
『ヘンリー八世』徹底勉強会
 〈第1回〉2020.1.13(月・祝) 〈第2回〉2020.1.26(日)
 〈第3回〉2020.2.1(土) 〈第4回〉2020.2.8(土)
 [時間] 14:00～16:00
 [会場] 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

チケット【参加費】(税込) 全席自由
 一般・メンバーズ 通し券3,200円、1回券1,000円
 U-25* 通し券1,600円、1回券500円
*1回券は通し券に残席があった場合のみ、12月14日(土)から販売いたします(一般・メンバーズとも)。
 *開場時間より先着順でのご入場となります。
 *U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。
 入場時に身分証明書をご提示ください。

【参加者募集】 「みんなのオルガン講座」初めて出会うパイプオルガン～パイプオルガンを知って、見て、触れてみよう～

彩の国さいたま芸術劇場では、小型のパイプオルガン“ポジティブ・オルガン”が体験できる「みんなのオルガン講座」を開講しています。「初めて出会うパイプオルガン」は、パイプオルガンの音が出るしくみを知り、楽器の内部を見学、最後に少し演奏してみよう！という講座です。講師は、東京藝術大学教授の大塚直哉氏で、そのわかりやすく、丁寧なお話はいつも大好評です。この機会に、普段はあまり間近に見たり、触ったりすることのない「パイプオルガン」という楽器に、親しんでみませんか。



初めて出会うパイプオルガン講座風景

♪オルガンの紹介
 パイプオルガンの美しい音はどのように作られるのでしょうか。楽器の仕組みや細部などを詳しく解説します。

♪オルガンの見学
 四角い木の箱のような形のポジティブ・オルガン。中はどんな風になっているのでしょうか。楽器の内部を大公開します。

♪オルガンの試奏(希望者)
 オルガンに触って、音を出してみよう！オルガンで弾いてみたい曲の楽譜をご持参ください。勿論楽譜なしで触ってみるだけでもOK！(時間の都合により、1曲を通して弾いていただけない場合もございます)

[日時] 2020年2月22日(土) 10:00～ (11:45終了予定)
 [会場] 彩の国さいたま芸術劇場 大練習室(地下2階)
 [講師] 大塚直哉
 [定員] 60名程度(試奏参加者は40名)
 [対象・受講料] 小学生以上対象・500円
 [申込締切] 2019年12月21日(土) 必着
 [申込方法] Eメール又は往復ハガキ(126円)の往信面に①郵便番号②住所③氏名(ふりがな)④年齢⑤電話番号⑥FAX番号⑦メールアドレス⑧試奏希望の有無をご記入の上、下記宛先までお申し込みください。
 ▶メール宛先 music@saf.or.jp
 (件名：みんなのオルガン講座 初めて出会うパイプオルガン申込)
 ▶往復ハガキ宛先
 〒338-8506さいたま市中央区上峰3-15-1
 彩の国さいたま芸術劇場 事業部
 「みんなのオルガン講座 初めて出会うパイプオルガン」係
 【お問合わせ】彩の国さいたま芸術劇場(音楽担当)
 TEL.048-858-5506

彩の国さいたま芸術劇場 「劇場体験ツアー」開催しました！



Photo◎加藤英弘

彩の国さいたま芸術劇場の大ホールを親子で巡るツアーが夏休みの8月22日～25日に開催されました。参加者たちは普段は入ることのできない舞台の裏側をくまなく探検。スタッフが照明や効果音を操作することで、舞台上が夜になったり、雨風が吹き荒れたり、森の中になったりと時間や天候、場所が次々と変化。舞台がつくられていく仕組みを間近で見学しました。ツアーの最後は「舞台の魔物」が住んでいるという(!?)奈落までせりを使って降りていき、再びせりが動き出すと突然始まった音楽と色とりどりの照明、スモークの演出に参加者たちは大興奮。大人も子どもも劇場の魅力を存分に味わうひと時となりました。

彩の国さいたま芸術劇場 「さいたまダンス・ラボラトリVol.2(2019)」 小尻健太&湯浅永麻による 夏期集中ワークショップ 公開リハーサル

若手ダンサーの育成と作品の創作を目的として2018年に開始した「さいたまダンス・ラボラトリ」企画の第二弾が開催され、講師は昨年引き続きネザーランド・ダンス・シアター (NDT)の元ダンサーで振付家としても世界で活躍する小尻健太と湯浅永麻。経歴が異なる選抜された22名(平均年齢22歳)の受講者は、13日間、1日8時間のワークショップの成果を最後の2日間で発表。NDTレパートリーはレッスン風景が公開され、講師より「身体の緩急の使い方、フォーメーションの見せ方、音楽のリズムと身体をどのようにリンクさせるかを考えてみて」とアドバイスされました。また創作では、それぞれの受講生が与えられた課題から生み出したシーンを取り入れ、演出により各講師のカラーも加わり意欲作に。受講者の目は輝き、未来に向けて大きなエールとなったようでした。



Photo◎matron2019

「蜷の綿 -Nina's Cotton-」リーディング公演 関連企画 

『蜷川幸雄シアター in 彩の国さいたま芸術劇場』 **チケット販売中**

10.13(日)～15(火)
 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール [協力] ホリプロ
 チケット(税込) [各回] 全席自由 1,800円(当日2,000円)
 U-25* 1,300円(当日1,500円)
*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。
 入場時に身分証明書をご提示ください。

10:	13日	14月祝	15火
10:00:	間違いの喜劇	ヴェニスの商人	
10:30:			間違いの喜劇
13:30:	ジュリアスシーザー		
16:30:		じゃじゃ馬馴らし	

*開場は開映の20分前

企画展「蜷川幸雄クロニクル」
10.1(火)～15(火)
 彩の国さいたま芸術劇場 ガレリア
*入場無料
 ※10月7日(月)休館日を除く9:00～22:00
 [同時開催]
企画展「彩の国シェイクスピア・シリーズ」
出演者手形・サイン色紙展
 彩の国さいたま芸術劇場 情報プラザ
 主催：さいたま市中央区
 共催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

サポーター会員

(公財)埼玉県芸術文化振興財団は、演劇、ダンス、音楽を中心に、この劇場でしか見られない最高の作品を提供できるよう、作品づくりに努めています。こうした財団の活動にご理解、ご支援をいただいているのがサポーター会員の皆様方です。(2019.9.15現在／一部未掲載)

㈱と野フードセンター／㈱亀屋／㈱松本商会／㈱香山壽夫建築研究所／埼玉新聞社／埼玉りそな銀行／㈱パシフィックアートセンター
 ㈱アサヒコミュニケーションズ／FM NACK5／㈱タムロン／㈱十万石ふくさや／森平舞台機構㈱／東芝ライテック㈱／埼玉トヨタ自動車㈱
 武蔵野銀行／ロイヤルパインズホテル浦和／アルピーノ村／国際照明㈱／埼玉スバル／㈱佐伯紙工所／㈱太陽商工／㈱しまむら／不動産㈱
 ビストロ やま／埼玉縣信用金庫／㈱栗原運輸／彩の国SPグループ／(有)ブラネッツ／㈱デサン／セントラル自動車技研㈱／丸美屋食品工業㈱
 ボラスグループ／ひがし歯科／埼玉トヨペット㈱／公認会計士 宮原敏夫事務所／㈱埼玉交通／サイデン化学㈱／アイル・コーポレーション㈱
 旭ビル管理㈱／ヤマハサウンドシステム㈱／㈱エヌテックサービス／㈱クリーン工房／㈱つばめタクシー／㈱サンワックス／㈱総合舞台
 (一財)さいたま住宅検査センター／㈱国大グループホールディングス／オーガスアリーナ㈱／イープラス／(医)榎会 林整形外科／埼玉県整形外科医会
 (医)山粋会 山崎整形外科／サンケイリビング新聞社／㈱三和広告社／ショッパー／㈱松尾楽器商会／日本大学芸術学部／㈱ホンダカーズ埼玉
 (有)杉田電機／丸茂電機㈱／太平ビルサービス㈱さいたま支店／㈱片岡食品／㈱協栄／㈱ヨコハマタイヤジャパン／NTT東日本 埼玉事業部
 ㈱平和自動車／光陽オリエントジャパン㈱／さくらMusic Office／クワバラ・パンぷキン／東和アークス㈱／テレビ埼玉／日本ビストンリング㈱
 金井大道具㈱／国立大学法人 埼玉大学／㈱七越製菓／ビーンズ与野本町／㈱コマーム／㈱原一探偵事務所／川口信用金庫／青木信用金庫
 ㈱和幸楽器／大栄不動産㈱／相川宗一／㈱ハイデイ日高／浦和実業学園中学・高等学校／三井隆司／大和証券㈱／AGS㈱／ウォータースタンド㈱
 ㈱ワイイーシーソリューションズ／白神久吉／医療法人青木会／むさし証券／㈱セレモニー／三菱UFJモルガン・スタンレー証券㈱／㈱積田電業社
 ボートピア岡部・栗橋／中央税務会計事務所／トヨタカローラ埼玉㈱／放送大学埼玉学習センター／GARO DAYHAPPY／㈱有村紙工
 (医)たかだクリニック／SMBC日興証券㈱／㈱アステック／㈱ジェイコムさいたま／㈱ヤナセ／㈱博愛社／トヨタカローラ新埼玉㈱／浦和興産㈱
 ㈱村松フルート製作所／東武商事㈱

お問合わせ (公財)埼玉県芸術文化振興財団 サポーター会員担当 TEL.048-858-5507

林家彦いちの 「一歩外人」

第10回



はやしや・ひこいち

1989年、林家木久蔵（現・木久扇）師匠へ入門。2000年に若手落語家の登竜門と呼ばれる『NHK新人演芸大賞落語部門』で大賞を受賞。2002年に真打昇進、全国各地で独演会を展開中。アウトドア派として国内外の山や川を制覇中。TBSラジオ「久米宏ラジオなんですけど」で披露している、選りすぐりの小噺をまとめた著書「睨目笑」（インタビューショナル）が10月発売予定。

ぷっくり幽霊 ぴょんぴょん幽霊

文と写真●林家彦いち

少し季節は遡るが、寄席の夏は怪談噺。今年も末廣亭恒例の林家正雀師匠『真景累ヶ淵 豊志賀の死』が口演された。噺の終盤に客席が真っ暗になり、薄明かりの元、噺家の隣にうっすらと現れる幽霊。「浮かんでくれ浮かんでくれ……」と唱えると幽霊が消える。ああ怖い。実は幽霊役は前座さん。

前座に私の弟子の「やまびこ」が入っている。どうやら今年は彼が幽霊をやるらしい。礼儀正しいが、小柄でこのところよく食べるのでぷっくりしている。幽霊にはあまり向かない。

初日。終盤浮かび上がる小柄な丸っこい幽霊。浮かんでくれ……と正雀師匠が言っても動こうとしない。きっかけがわからなくなったようだ。とうとう、師匠が肘で幽霊の腰あたりを突く。打ち合わせとは違う肘の動きに身をよじる。最後には師匠が指で突っいたら、頭を下げて袖に引っ込む小柄幽霊。大きくじりである。

そういえば私も27、28年前、同じく正雀師匠の怪談噺を手伝ったことがあった。場所はイイノホール。大きい会場で緊張感があったが、いつもの寄席の心持ちで幽霊役をやれば大丈夫と臨んだ。

終盤、真っ暗な舞台に浮かび上がる私。寄席とは違うホールで、初めてピンスポット。きゃーという声も。今思えば空手と柔道あがりの肩幅しっかりした幽霊もどうかと思うなあ。その後、浮かんでくれ……であかりの下からそっと移動。師匠の「さて恐ろしき執念じゃなあ」のセリフで客席が



末廣亭の静寂な楽屋。高座に即対応!?出来るようになっている。

明転。そこで事件が起きた。

幽霊の衣裳は裾が絞ってすばまっていて実に歩きにくい。寄席であれば袖が近いのでちょこちょこ歩けばハケることが出来るのだが、ここはイイノホール。明るくなくても私はまだ袖まで半分にも到達してない。ざわつく客席。お面をしたまま正雀師匠の顔を見ると怪談噺の殺しの場面くらい怖い顔をしている。このままではいけない。早くこの場からいなくなることを最優先に考えた私は、ぴょんぴょん飛びながら袖にハケた。

会場がどっと笑っている。笑ってもらうことは好きだが、この場合は違う。大変なことをしでかしたということだけはわかった。

あれから随分年数が経った後、正雀師匠がこのことを噺の枕で話していた。「彼が若いころね、ガタイのいい幽霊がぴょんぴょん跳ねてねえ、アタシはキョンシーかと思ったよ」。ちょっとホッとした。

師弟でしくじる怪談噺。さて恐ろしきい〜夏お開きっ。



演劇担当 @Play_SAF
舞踊担当 @Dance_SAF
音楽担当 @Music_SAF



彩の国さいたま芸術劇場 @saitamaartstheater
埼玉会館 @saitamakaikan



Instagram 埼玉会館 @saitamakaikan

www.saf.or.jp

埼玉アーツシアター通信 第83号(10月-11月)

2019年10月1日発行(隔月1日発行)

発行人: 竹内文則

発行: 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

〒338-8506 さいたま市中央区上峰3-15-1 TEL.048-858-5500